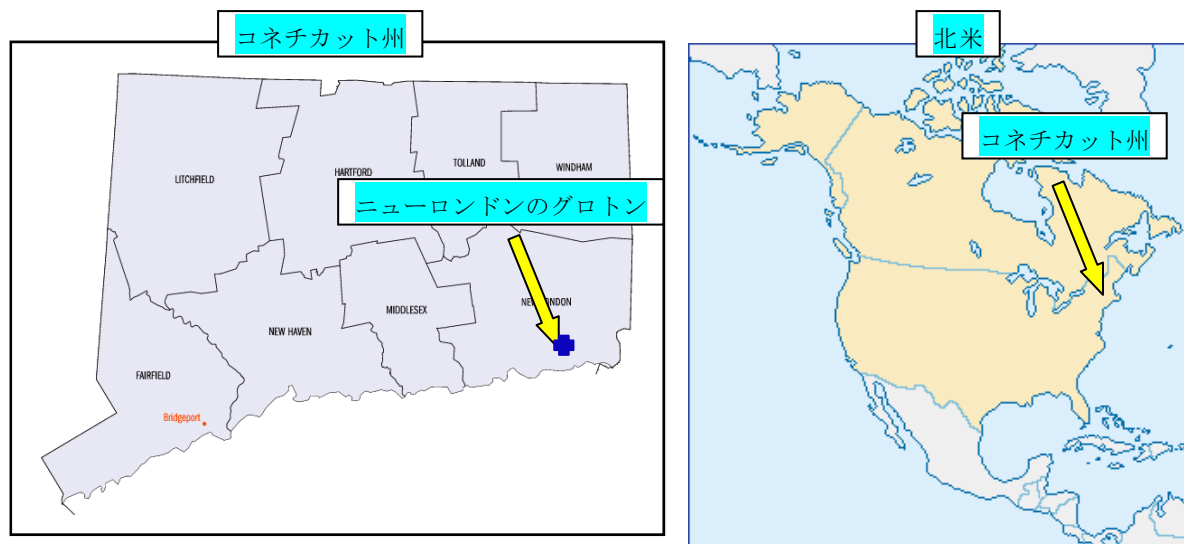


バイオ教授の「世界の大学・研究所」

ファイザー(Pfizer)本社研究所：米国コネチカット州

白楽ロックビル

お茶の水女子大学大学院・人間文化創成科学研究科・ライフサイエンス専攻



(出典：<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/europe.html>)

2002年7月アメリカ・コネチカット州で開催されたゴードン会議「アメリカの科学技術政策の最前線(Frontiers of US Science & Technology Policy)」の企画で、コネチカット州ニューロンドン(New London)のグロトン(Groton)にある世界最大の製薬会社・ファイザー(Pfizer)の本社研究所を見学した。ファイザー社のホームページは<http://www.pfizer.com/home/>である。



ファイザー社の用意してくれた大型コーチバスに約40人が乗り込んだ。10分ほどのドライブでファイザー社のゲートについた。ファイザー社の見学コーディネーターであるケイト・克蘭シー(Kate Clancy)がみんなを出迎えてくれた。下の写真のサングラス男性(左側)が今回のゴードン会議・議長のダリル・チュービン、その右のサングラス女性がケイト・克蘭シーだ。



広大なキャンパスである。見学者 40 人は 3 つの班に別れ、研究所内の見学ツアーに従った。ステキなお嬢さんシェリーがボクらを案内してくれる。シェリーは美人なので案内係に向いている。しかし、彼女の声は通りにくい。説明は聞きとりにくい。美人を眺めにきたわけじゃないのヨ。なお、シェリーに聞くと、キャンパス内の写真撮影は禁止だという。ザンネン！ 世界最大の製薬会社研究所の重要機密を白日のもとに公開しようとしたのに。

ファイザーの本社が、このコネチカット州ニューロンドンの地にオープンしたのは 2001 年 7 月である。まだたったの 1 年しかたっていない。ファイザー社は世界中に 1 万 2 千人の研究者を抱え、年間 50 億ドルの研究開発費を使い、300 億ドルを売り上げる世界最大の医薬品会社である。最近、ファルマシア社を吸収した。見学者の質問はそこに集中した。

案内役シェリーに連れられて、普通の実験室をいくつか見ると、研究者は話しているかパソコンを叩いている。シェリーが自慢げに見せてくれた実験室ではロボットがあった。チップテクノロジーやハイスループットスクリーニングで使う先端技術で高価な装置だ。つまり、研究者はパソコンを叩き、実験はロボットがする。まあ、こういう時代というわけだ。

シェリーに案内されて、右に左に研究所内を歩き、エレベーターに乗り、どこをどう回っているのか分からない。ただ、建物は綺麗で、デザインはモダン、廊下にガラクタが置いてな……あ、あ、あったヨ。コピー機と冷蔵庫は実験棟の一部においてあった。最後は、美しい絵画が並べてあるギャラリー廊下やステキな彫刻が並べてあるギャラリー廊下を通り、会議室に向かった。

会議室の片隅にクッキーとプレツェル、缶入りソーダとボトル入りの水が用意されていた。ここで、ジョー・ハマング (Joe Hammang) の「医薬品開発の現状」の講演を 1 時間あまり聴いた。



彼は、3 ヶ月前にファイザー社の科学政策対外部の副部長に就任した神経生物学の博士号をもつ人である。「講演の途中で質問していい」と最初に言うものだから、例によって山ほどの質問が湧かせられた。ジョー・ハマングは黒いスーツとネクタイ(サスガ、会社人間!)、白髪である。誰に似ているか? 映画俳優のスティーブ・マーティンだ。

現代の医薬品開発は大変である。

数十万の化合物から 1 つの医薬品になるまで、12~15 年と 1 兆円の経費がかかる。特許を取得すれば儲けは永続するというのは幻想のようだ。特許の恩恵は少ないらしい。そもそも、医薬品の商品化には特許取得後 12~15 年もかかるから、製品として売り出してからの特許有効期間が短い。特許取得後 7 年くらいで市場化できる情報産業とはかなり異なる。また、製品化して数年で新しい薬に取って代られる。特許の期限が切れる前である。さらに、化学構造を少し変えただけで特許を侵害しないノーブランドのジェネリック薬に市場が奪われてしまう。

世界の医薬品会社を 2001 年の研究開発費の高い順に 10 社ほどリストして見せてくれた。もちろんトップはファイザー社で 48 億ドル、2 位はグラクソ・スミスクライン社の 38 億ドル、3 位はアベンティス社の 32 億ドル、とならぶ。ナント、日本の医薬品会社は一切出てこない。話のハシ、ハシのスミ、スミの言外にも日本の医薬品会社は出てこないのである。アメリカの医薬品会社は、日本の医薬品会社を歯牙にもかけていない。日本のバイオ研究者としては、複雑な気持ちだ。